

10
5
5

THE
UNION READER
NUMBER THREE.

サンダーズ氏著
佐藤重道口譯
外山義文筆記

卷之上

サ
ダ
ー
ズ
第
三
讀
本
意
譯

東京
三書館藏版

特27
472

THE
UNION READER
NUMBER THREE.

外語

東京

三書館藏版

第三讀本意譯

サングラス氏著
佐藤重道口譯
山義文筆記

上之卷

UNION READER

東洋英和學費質教授
速成則不得全欲進究其奧非正則不能也
於是決意負笈入於東洋英和學費質教授

撒達斯氏第三讀本意譯序

余學英語。讀英書。十數月於茲。語未熟。義未通。竊疑學語之與讀書。業全異矣。欲廢其一。修其一。復恐其不達也。既而以爲維新之際。修英學之士。概由變則。不由正則。蓋其要與由正則之完備。寧在由變則之速成也。然欲速成。則不得全。欲進究其奧。非正則不能也。於是。決意負笈入於東洋英和學費質教授。

佐藤先生以前疑。先生曰。彼此一學藝耳。不可偏廢也。大凡助語學之進步。示意味之曲折者。莫善於讀本。而讀讀本之要。在得歐人之意。而譯之簡易邦語。若能精竅周密。修之半載。則庶幾得其要領乎。又曰。子不知鸚鵡乎。彼不能解語。而能爲人語。不擇其倭與英也。此無他。以敏察其音調也。可以人而不如鳥乎。余唯唯而退。尚懷孤疑。從是虛心。聞先生之講演。有日。語簡意達。愈服其言有徵。至是。所先疑者。始冰解矣。乃筆記之。以備座右。即撒達斯氏第三讀本意譯。是也。一日同友來訪。談偶及於此。余乃告以前言。亦出此記示之。同友喜曰。有是哉。斯書不啻爲語學之助。亦足以勸誡世之子弟。宜公之世。余辭以言詞鄙陋。弗聽。乃以咨先生。先生批閱許之。遂命工上梓云。

明治十八年五月

記者識

凡例

一本書ハ米國サンダーズ氏著「ユニオン、サアド、リーダー」ヲ意譯シタルモノニシテ其主意英語學ヲ究ムルノ助ニ供セント欲スルヲ以テ專ラ文字ニ拘束セスシテ意味ヲ貫徹シ簡易ノ邦語ヲ以テ圓滑ノ英語ヲ寫スノ捷徑ヲ示セリ故ニ其對話ハ之ヲ譯スルニ平語ヲ以テシ其他ハ假名文ヲ以テシ片言隻語モ草卒ニ筆ヲ下サス其言詞ノ鄙陋ナル固ヨリ大方ノ嗤笑ヲ免レスト雖モ苟クモ英語學ニ志スノ士ニ益スル所アレハ記者敢テ之ヲ辭セサルナリ

一方今直譯書ノ世ニ行ハル、モノ一ニシテ足ラスト雖モ其盤根錯節通シ難キ所ハ之レヲ脱シ殊ニ詩ニ至テハ之ヲ譯スルモノ希ナリ殆ント人ヲシテ靴ヲ隔テ痒ヲ爬クノ感ヲ起サシム今本書ハ此難關ヲ透過スルノ便益ヲ與ヘ且ツ原著者斯書ヲ以テ修身ノ階梯ト爲スノ

微意ヲ察シ特ニ意ヲ加ヘテ之ヲ譯セリ故ニ獨リ英學ヲ修ムルノ士
ノミニ限ラス亦タ以テ家庭ノ教訓ニ充ツヘキナリ

一原文間言盡キテ意盡キサルモノアリテ之レヲ邦語ニ譯スルトキハ
其意ヲ傷フノ恐レアルヲ以テ括弧()ヲ設ケテ以テ其意ヲ充滿セ
シム

一原著ハ兒童ノ教科書ニ充タルモノナルガ故ニ其始メニ綴字發音及
ヒ抑揚ノ要領ヲ舉ケ且ツ文法上ノ記號ヲモ附加セリ今譯書ニ要ナ
ケレハ之レヲ省ク

一書中人名ハ右傍ニ單線——ヲ施シテ之レヲ示シ地名ハ雙線|||ヲ
施シテ之レヲ表セリ又談話ノ語ハ其頭脚ニ「」ヲ施シ且ツ平假名
ヲ交ヘテ之レヲ別チ及ヒ固有名稱ノ譯シ難キモノハ單ニ「」ノミ
ヲ施シ書名ハ「」ヲ以テセリ

一詩ハ近体ニ倣テ之レヲ譯スレハ口調モ善ク感覺モ敏ナル可シト雖
モ其ノ修飾ノ爲メニ原文ヲ變換増減スルハ本譯ノ意ニアラス故ニ
之レヲ譯スルニ通常文章ノ体裁ヲ以テシ以テ其原意ヲ貫徹セシム
讀者幸ニ之レヲ諒セヨ

記 者 識

「サ
ス」氏「ユ
ニ」チ「ソ」第三讀本意譯卷之上目次

第一章	フアニー及ヒ其弟子ノ事	一	丁
第二章	蹄釘ノ事	四	丁
第三章	眞ノ英雄	六	丁
第四章	野狐ト家禽ノ事	九	丁
第五章	爭論ヲ終局ス可キ最良ノ時期	十	六丁
第六章	如何シテ敵ニ勝ツ可キ乎	十	九丁
第七章	エレン及ヒ其カナリヤ鳥ノ事	二	十三丁
第八章	火中ノ肖像	二	十七丁
第九章	破損シタル窓硝子ノ事	三	十三丁
第十章	「爲サ、ルヲ得ス」ト云フ言ヲ好マサ リシ子供ノ事	三	十七丁

第十一章	小事詩	四十丁
第十二章	更紗布ノ三角形ノ一片	四十一丁
第十三章	農夫及ヒ其鸚鵡鳥ノ事	四十八丁
第十四章	小サキピートー及ヒ偉人ノ事	五十一丁
第十五章	輕少ナル親切詩	五十六丁
第十六章	誕生日ノ訪問	五十七丁
第十七章	ハアサノ美麗ナル贈物	六十丁
第十八章	苛刻猛惡ノ言ヲ慎シム可シ	六十五丁
第十九章	雪片ノ美妙及ヒ利用	七十丁
第二十章	勉勵ト遊戯詩	七十五丁

1 | サンド
氏「ユニオン」第三讀本意譯卷之上目次畢

1 | サンド
氏「ユニオン」第三讀本意譯卷之上

米國 サンドー ス 氏 原著
日本 佐藤 重道 口譯
全 外山 義文 筆記

○第一章 ファニー及其弟子ノ事

(第一節) ファニーハ活潑ナル小女ニシテモノヲ覺ユルニ敏シ其母家ニ
在リテ能ク之レヲ教エタルガ故ニ未ダ七歳ナラザルニサンドー
ノ「ユニオン」第二讀本ヲ讀ミ得タリ

(第二節) ファニーノ母二十六枚ノ紙札ニ英ノ二十六文字ヲ一字ツ、印
刷シタルモノヲ持テ來リ之レヲ以テ弟フランシニ二十六文字ヲ教
ヘ是レモ亦タ學校ニ行テ讀書ヲ學ヒ得ルニ至ラシメヨトファニーニ
命ゼリ

(第三節) 母ハ彼ノ札ヲ床上ニ散ラシテフランクヲシテ一々之レヲ取
 ラシメ且ツフアニーヲシテ其文字ノ名ヲ一々教ヘシメタリフアニーハ
 二三度二十六文字ノ名ヲフランクニ教ヘタレハ最早ヤ悉ク覺エシ
 ナラント思ヒシガ然ハアテデ「オー」ト「エス」ノ外ハ一字モ覺ヘザリキ」
 (第四節) 是ニ於テフアニーノ曰ク「フランクよ汝ハ如何も愚鈍である
 ぞへ汝の犬のギキシーとても誰れか教へるものさへあれは汝より
 早く此等の文字を皆覺へるぞへ」ト

(第五節) ギキシーハ其名ヲ云フ聲ヲ聞キタレハ尾ヲ振リナガラ彼方
 ヨリ兩人ノ居タル部屋ニ來タリフアニーノ傍ニ座ヲ占メタリ然シテ
 フランクハ「エー」字ヲ書シタル札ヲ取テフアニーニ向ヒ「サー先生此の
 新入の御弟子で教之方の御上手な所を御試しなされ」ト云へり

(第六節) フアニーハ犬ノ首ニ片手ヲ置キ札ニ書シタル文字ヲ示シテ「サ
 ー小僧よこれ何だへ」ト云ヒシニ犬ハ只フアニーノ顔ヲ見詰メテ其
 言ノサモ解ラヌガ如キ有様ナリキ

(第七節) 再タビ彼ノ文字ニ指シ「サー小僧や頭を揚げて「エー」と云ひな
 ト命ゼシモ犬ハ只「ワン」ト云フノ外ナシ是ニ於テ彼ノ二人ハ犬ガ「エ
 ー」ト云ハントシテ「ワン」ト云フヲ見テ笑フニ忍ヒズ暫クシテフラン
 クノ曰ク「ワン」杯と云ふ文字のないソレ御覽ギキシーハ汝の思ふ程
 敏くハ在りませぬ吠ることハ出來ませぬが語ることハ出來ませぬ」
 ト

(第八節) フランクノ此言ヲ聞テ其母ノ曰ク「其通り犬や其他の獸類ハ
 教ゆれば多くの事を覺ゆるあれども話しを爲るとハ決して出來ぬ
 解語の能ハ獨り人間のみ賦與せられたるものよして人ハ此能力
 あるハ即ち万物ヲ勝れたる一の理由である」ト

○第二章 蹄釘ノ事

(第一節) 一農アリ曾テ市ニ往キテ穀物ヲ鬻キ多クノ金ヲ獲タレハ未
タ日ノ暮レサル前ニ其家ニ達センカ爲メニ朝早ク出立セリ

(第二節) 正午ニ及ンデ農夫其馬ニ秣ヒ且ツ自ラモ晝食ヲ辨ゼンガ爲
メニ茶亭ニ憩ヘリ食終ツテ再タビ出立セントスルトキ客舎ノ馬丁
馬ヲ牽キ來リテ農夫ニ告テ曰ク「君よ左りの前足の蹄鐵の釘が失へ
てありま」と

(第三節) 農夫答テ曰ク「夫ハ捨置け私ハ今大騒急いで居る故それを注
意テ居る暇がない此處から二十英里間は大丈夫保つであらふ」と云
ツ、再タビ途ニ上レリ

(第四節) 午後ニ農夫ハ其馬ニ秣ハソ爲メニ再タビ休メリ茶亭ニ腰掛
テアルトキ廐童入り來リテ曰ク「君の馬が左りの前足の蹄鐵を失ひ

ました蹄鐵師へ行て一本打たせて來ませうか」と

(第五節) 農夫答テ曰ク「否今の無用なり私の往くべき道程ハ只八英里
なれば其位の距離ハ馬も充分達者ニ歩むであらふ今時間ハ猶餘が
な」と

(第六節) 終ニ農夫ハ騎リ出タリシガ馬ハ幾ハクモ進マザルニ其蹄鐵
ヲ失ヒ爲メニ跛キ始ム少時ニシテ又躓ツキ忽チ倒レテ其一足ヲ傷
ケタリ

(第七節) 是ニ至テ已ムヲ得ス農夫ハ其倒レタル馬ヲ路上ニ殘シテ徒
行家路ニ向ヒタリシモ森林ニ入りテ路ヲ失ヒ更深ルマデ其家ニ達
スルヲ得ザリキ乃チ自ラ歎シテ曰ク「我が不幸ハ全ク蹄釘一本ヲ怠
タリタルニヨリテ來レリ」と

(第八節) 蹄釘一本ノ缺ヨク蹄ヲ失フニ至リ蹄ヲキガ爲メニ馬ヲ失

ヒ馬ナキヲ以テ道ニ迷ヘリ是レ皆ナ蹄釘一本ヲ怠タリシニ由ル

○第三章 眞ノ英雄

(第一節) 一日大ニ雨降り野外ニ出ル能ハザルヲ以テ數年已前英國及ヒ其他ノ國ニ顯ハレテ英雄ト呼バレタル諸大家ノ列傳ヲ讀ミ居タリ

(第二節) 是ニ於テ我ガ頭腦ハ戰爭攻襲即チ城堡ヲ陷落シ及ヒ都會ヲ掠奪スルヲ以テ充滿セリ爲メニ其夜晚餐ヲ食スルニ當テ我ガ讀ミ得タリキ事ト其ニ就テ心ニ思タル事トヲ吾父ニ語り出デタリ

(第三節) 少時相語りタル後父ニ謂テ曰ク「父上私ノ大家になりたいものです英雄になつて兵隊を率て戰場へ行き度思ひます」ト

(第四節) 父我ヲ顧ミテ微笑ス察スルニ吾カ容貌英雄ノ如クナラサリ

シガ故ナルベシ父ノ曰ク「汝ハ兵隊を率ひて戰場へ出すして大家になるとの出来ぬか」ト

(第五節) 我レ曰ク「否父上然らざれば英雄のあれませぬ大勇氣を顯はし數度の戰場へ出たとなげければ英雄になるとの出来ないと思像ます」ト

(第六節) 父問テ曰ク「汝ハ英雄と云ふとを何と思ふて居る乎」ト是ニ至テ少シク困難ヲ感シタリキ

(第七節) 已ニシテ答テ曰ク「何故父上汝ハ定めし英雄の何だか御承知でしよう英雄と云ふものハ大功をなし剛勇として善く戦ふ大家を云ふものです」ト

(第八節) 父ノ曰ク「それでハ私も云はせるならば誰れでも戰爭に出ずして英雄も成れる汝も其一人となるとが出来る人が其英雄たるを

顯のすゝめ是非軍役に従ふべし及ばぬ

(第九節) 大行となし甚だ剛勇にして正義の爲め苦しむとならば苦痛を恐れぬ人々の事を私に多く讀んだ此等の人々の縦令戦争一度も行かずとも實に英雄と云ふべきものだと思ふ

(第十節) 私の諸國を征伐するより寧ろ衆人の生命を救ひ又の劍戟の代り平和を地上に持來たすを目的とした諸英雄の傳を讀むとが好きである

(第十一節) 此等の英雄中大危難を耐忍し且つ眞理の爲め其生命をも抛つたものがある彼の大慈善家 ハワード 其人の若きもの同胞は善事を盡さんが爲め諸國を巡りて囚虜の病を訪たことがある
(第十二節) 我が子よ善き行を示し吾人をして其貴むべき品行を効はんとするの念を深く起さしむるものを英雄と云ふべきものである

るト

(第十三節) 時ニ我カ父ハ我カ爲メニ説明ヲ試ミ眞ノ英雄トハ眞理ノ爲メニ充分ノ勇氣ヲ有テ公衆ノ爲メニ善キ勤ムルモノナルヲ告ゲタリ

(第十四節) 是レ我カ十二歳ヲ出デザル頃ヒニ學ビ得タル教科ニシテ其後大家トシテ評サル、モノアル毎トニ未ダ曾テ是レ果シテ我が父ノ所謂英雄ナルモノナリヤ否ヤト自ラ心ニ言ハズシテ之レヲ聞カズンバアラズ

○第四章 野狐ト家禽ノ事

(第一節) 農夫フルトン多クノ鳥ヲ養ヘリ一日其小女エーミーニ語テ能ク雛、鶏、鴨及ヒ雛鵝ニ心ヲ注クヘシ我ハ好キ庭ヲ作り且ツ狐ヲシテ夜之レヲ捕取セザラシメンガ爲メニ寢屋ヲ作ルヘシト云ヘリ

(第二節) 是ニ於テ農夫ハ庭ノ四面ニ高キ屏ヲ築キ鳥ハ戸ノ開キタルニ非レハ其外ニ出ツルヲ能ハザリキ又庭中ニ水アリテ彼等ノ飲料ニ供シ且ツ鴨ト鵝ハ之ニ游泳スルヲ得タリ

(第三節) 庭中若干ノ水場所ヲ設ケテ鵝鴨ノ寢屋トナシ又別ニ小屋ヲ設ケテ之レニ架スルニ數本ノ横木ヲ以テシ以テ牝鷄七面鳥ノ寢屋トナシ此材上ニ止マリ眠ラシムルノ用ニ充テタリ蓋シ牝鷄七面鳥駒鳥ノ如キモノハ殆ント皆ナ狐其他ノ動物ノ捕櫻ヲ免レンカ爲メニ眠ルトキハ必ス空中ニ高ク立テルモノヲ好メバナリ

(第四節) 如斯基鳥ハ落ツルノ恐レアルコトナシ如何トナレハ其足ト爪トヲ以テ堅ク其棒ヲ保テバナリ或ル日ノ暮鳥ノ外ニ出デ得ルガ爲メニ此庭ノ戸ハ開カレタリ其番人ハ鳥ノ必ス飯リ來リテ其寢屋ニ眠ラント欲スルヲ知り黄昏ニ之レヲ外ニ放ツモ遠ク去ルヲ好マ

ザルベシト思ヘリ

(第五節) 曾テ衆鳥屏ノ外ニ出テハ小丘ノ下トニ傍フテ遊ビ行ケリ其頂ニハ小石ヲ多ク積ミ累テタルモノアリ老牡鷄先キニ進ミ老雄之レニ次ケリ然フシテ老牡鷄ハ進ミナガラ數分時毎ニ止マツテ甚タ高聲ニ叫ベリ

(第六節) 七面鳥寬歩シテ雄雞ノ後ニ來リ意氣甚タ傲然タリ其頭ヲ直立シ大步シテ其尾ヲ擴張シ恰モ兒童ノ輪ノ如キ大圓形ヲナセリ鵝鷄進ンテ其前ニ至ルトキ之レヲシテ回顧シテ己レヲ見セシメゾガ爲メニ叫ブコト三聲ス

(第七節) 忽チ牝鷄ハ叫喚シ鵝雞ハ其首ヲ延ベテ叱咤セリ已ニシテ衆鳥齊シク望ンテ懼ルハアルガ如シ是レ帽大ノ石小丘ヲ轉輾シテ下リ彼等ノ中央ニ來レルナリ

(第八節) 衆鳥其石ヲシテ墜落セシムルモノハ誰ナルヲ知ラス疑フラ
ク丘上ニ人アリ彼等ヲ殺サント試ルモノナルヘシト然ルニ一人
ノ丘上ニ在ルモノヲ見ズ直ニ其恐懼ヲ拋棄セリ

(第九節) 時ニ他ノ一石轉輾シテ下リ牡鵝ノ側ニ來リ鵝驚キ避ケント
シテ飛騰セリ然ルニ一石ノタメニ追驅セラル、チ好マズ故ニ石ノ
轉行スルヲ追テ走リ其首ヲ延ベテ之レチ叱咤セリ

(第十節) 時ニ他石再タヒ轉輾シテ下リ數石次テ下ル是ニ至テ衆鳥石
ノ害ヲナサ、リシヲ見テ以爲ラク石ノ小丘ヲ下ルハ敢テ怪ムニ足
ラスト

(第十一節) 時ニ赤色ノモノ下レリ衆鳥見テ石ナリト思ヒシニ轉シテ
彼等ノ中央ニ至ルトキ始メテ一ノ野狐ナルヲ發見セリ各自逃レ
シトスルノ暇モナク狐ハ已ニ一鵝ノ首ヲ捉ヘテ以テ其穴ニ走レリ

(第十二節) 野狐鵝ヲ捉ヘントシテ最初ニ鳥群ノ中ニ走ラズ猶智アリ
ト謂フベシ蓋シ若シ最初ニ走ラハ群鳥ハ逃レ去ルカ然ラザレバ牡
鵝雄雞ノ銳喙ヲ以テ彼レヲ啄ハミ或ハ其翼ヲ以テ彼レヲ害セント
スルヲ知レバナリ故ニ先ヅ石ヲ下シテ群鳥ヲシテ之レヲ見ルニ
馴レシメ而シテ後自ラ其中ニ下レリ

(第十三節) 惡人他人ヲシテ惡ヲ作サシメント試ムルモ皆此術ヲ用フ
彼レ最初ニ人ヲシテ其惡タルヲ知ル些少ノ事ヲ作サシムルニ誘ヒ
後其大惡ノモノヲ作サシムルニ及ブ彼レ始メニ人ヲシテ一時ハ小
惡ノモノヲラシメ遂ニハ檻倉ニ送テレ或ハ首ヲ絞臺ニ繫ケラル、
ニ至ルノ大惡ヲ作サシム

(第十四節) 小兒アリ名ツケテローヤルト云フ其母彼ヲシテ惡友ヲ避
ケシメント欲シテ甚タ眷顧セリローヤル人ト爲リ正直其母ノ命ニ

背クヲナシ且ツ妄語ヲ爲スヲ恐レタリ其惡タルヲ知ルガ故ナリ
 (第十五節) 其母命シテ曰ク我レ之レヲ命スルニアラザレバ汝店舖ニ
 往クヲ莫レトローヤル時ニ往テ鶏卵或ハ其他ノ品ヲ購フヲアレハ
 カチ極メテ速ニ歸ルヲ常トセリ其母ローヤルニ如斯ク命スル所以
 ハ他ナシ惡言ヲ語ルガ如キ兒童ハ時トシテハ無賴ニ廊頭ニ立テル
 ヲ以テローヤルノ彼等ト友タルヲ欲セザレハナリ

(第十六節) ローヤル曾テ其母ノ爲メニ使シテ一ノ廊前ヲ過キ行カン
 トスルニ適々惡童ロバートニ會セリロバート固トローヤルヲ愛セ
 ズ蓋シローヤル妄語ヲ犯シ惡言ヲ語ルヲ屑シトセサレハナリ故ニ
 ロバート屢々ローヤルヲシテ惡事ヲ作サシメントヲ試ミタリト雖
 モ未ダ曾テ之レヲ作サシムル能ハザリキ蓋シローヤルノ母常ニ堅
 シ之レヲ戒シメタルニ由ルナリ

(第十七節) ロバートローヤルニ會スルヤ謂テ曰ク汝若シ能ク惡言ヲ
 語リ得バ我レ汝ニ小畫冊ヲ與ヘントローヤル甚ダ書冊ヲ要セルヲ
 以テ深ク之レヲ考フルニ違アラス其ノ之レヲ語ルニ好理由アルト
 即チ己レニ未ダ知ラザリシ或ル事物ヲ教フベキ冊子ヲ得ルトニ於
 テ唯一回惡言ヲ語ルモ敢テ甚シキ惡事タリトモ思ハザリキ

(第十八節) ローヤル遂ニ惡言ヲ語リ其冊子ヲ得ンガ爲メニ其母ノ許
 可ヲ得スシテロバート與ニ一書郵ニ行キ之レヲ得テ後其家ニ歸
 レリ然ルニ其家ニ達スルニ先ツテ其ノ已ニ口外セル言ニ就テ心惡
 シク感シ其發言シタルヲ悔ヒタリ歸リテ遂ニ其母ニ其惡言ハ何タ
 リキカチ告グリ蓋シ其母強テ之レヲ告グシメタレハナリ

(第十九節) ローヤル痛哭シテ未曾有ノ苦感ヲ覺ヘタリ蓋シ其ノ甚タ
 シキ惡事タリシヲ反省スレハナリ母ハローヤルヲシテ冊子ヲ保持

セシメズ之レヲ彼ノ書庫ニ返サシメ且ツ言ハシメテ曰ク我レ悪言ヲ語リテ此冊子ヲ博シ得タリト而シテ又番頭ニ告ゲテ之レヲ悪童ロハートニ與ヘヨト云フベシト命ジタリ

○第五章 爭論ヲ終局スベキ最良ノ時期

(第一節) 汝曾テ小流水ノ輦地ノ堤防ヲ破潰セルヲ見タリヤ恐ラクハ其初メタル只狹隘ノ通口ヲナシテ細流觴ヲ濫フニ過ギザリキ

(第二節) 然ルニ流動日ヲ累ヌルニ隨テ漸々其地ヲ洗去シ其勢力從テ増加シ遂ニ自ラ曠漠タル渡口トナリ急流洋溢シテ走ルニ至ル

(第三節) 故ニ箴言ニ曰ク爭端ノ起ルヤ水ノ隙ヲ破ルガ如シト凡ソ爭論ハ微細ノ争ヒ或ハ粗暴ナル言ノ如キ小事ニ始マル然リト雖モ此ニ止マラスシテ益々増進シ遂ニ局ヲ諍闘ニ結フニ至タルヲ屢々ア

(第四節) シヨン及ヒジョーシ、パースガ其使用セル鋸ニ付テ兄弟相

論シ且ツ相争ヒタルモ其起元ハ此道理ノ外ナラズ即チ左ノ如シ

(第五節) (ジョーシ) シヨン 汝ハ私の鋸を使用タリバ又本の場所へ還シテ置いて貰ひたいチー入用のあるときよ認められないような處よ置き放しよせるのは私が好かないと云ふとの汝も知て居るだらう

(第六節) (ジョーシ) へー私が汝の鋸を使用してから左様云ふとを云ひなさい私の汝の鋸よ觸れたともない

(第七節) (ジョーシ) 何故ジョーシ 汝ハ昨日それを持て居たとい知て居るだらう私が自身で汝よ其れを貸したもの

(第八節) (ジョーシ) ヨシ私が使用タおしても後で其れを還して置タオマケよ今朝自分が使用タくせよ

(第九節) (ジョーシ) 私の今朝それを使用ハぬ汝が借てから持たといな

いそして若し汝がそれを還して置たなら本の場所よなけにやあらぬ
 (第十節) (ジョン) 私にそれを還して置たと云ふもサ汝の今朝それを用
 ひて鳥の小屋に遣ふ其板を鋸割て居た私の儘かよ此眼で見て置た
 (第十一節) (ジョーシ) 今朝汝の眼で私を見たといない他も私を見た人
 もなかつた私が其板を鋸割たのは昨日の朝だ私のもう再たび容易
 く其鋸を汝も貸してやらぬ

(第十二節) (ジョン) 汝の古鋸を大切にして置きあさい誰が其んなもの
 を欲しがらぬものか欲ければ最と善いのを得られる

(第十三節) 此等ノ兩童ノ相非難スヘキハ明白ナリ最後ニ其鋸ヲ使用
 シタコニ就テ孰レノ云フ所カ正シキヤ吾レ未タ之レヲ知ラズト雖
 而モ兩童ノ之レニ關シテ口論ヲナスガ如キハ又非難ヲ免レサル
 所ナリ

(第十四節) 若シジョンヲシテ親切ナル音調ヲ以テ其兄弟ニ答テ左様
 シヨ一シ私ハ汝が其鋸を置き捨てよさるゝを好まぬとを知る私の
 ろれを還して置たと思ふト云ハシメバジョーシモ亦タ等シキ語氣
 ナ以テ之レニ答フルナルヘシ

(第十五節) 若シジョーシヲシテ其兄弟ガ今朝ジョーシ自身ニ其鋸ヲ
 使用シタリト語リシキそれハ昨日の朝であつたと思ふ併し何でも
 いゝそのやうなとに争論ハ好まぬト云ハシメタランニハ兩童ノ中ニ一
 ノ争論ナカルベシ左レハ争論ハ其最初ニ終局スルハ常ニ最良法タリ
 ○第六章 如何シテ敵ニ勝ツベキ乎

(第一節) シウリヤハ快活ナル同齡ノ小女ト與ニ學校ニ往クヲ常トセ
 リ其道ニ僅カ長シタル女子ニ屢々逢ヒテ之レカ爲メ或ハ賤メラレ
 或ハ罵ラル、コアリキ此ノ女子ハ或ル時二人ヲ道ヨリ押出シ又ハ

雪丸ヲ其顔ニ投ケタリ

(第二節) 此ノ不親切ナル取扱ヒノ其ノ何ニ原因スルヤハ只此ノ女子ノ惡戯ニシテ彼等ガ未ダ曾テ一ノ災害ヲ與ヘサルニモ係ハラス他人ヲ罵辱シテ以テ自ラ愉快ヲ取ラントスルノ外ナキナリ

(第三節) 此等ノ小嬢ハ斯ク狂惡ナル待遇ヲ堪忍シテ久シク愁訴セサリシモ遂ニシウリヤモ今ハ之レヲ耐ユル能ハサルヲ感シ往テ其母ニ語レリ

(第四節) シウリヤノ母ハ一女子ノ他ノ小嬢ノ徐カニ學校ニ到ラントスルキニ當テ之レヲ辱シメ之レヲ困ムルカ如キ不親切ナル舉動アルヲ聞クヤ大ニ之レヲ悲シミ少時其事ヲ熟計セル後如何シテ其惡女子ニ勝テ却テ彼ヲシテ親切ニ且ツ信誼ノ友タラシムヘキ乎ナシウリヤニ示セリ

(第五節) シウリヤ其母ニ計畫アリテ此惡女子ニ勝テ得ルヲ聞キ心快然トシテ曰ク「私ハ是非復讐の道を求めたく思ひます」トテ其策如何ヲ示サレソコヲ請ヘリ

(第六節) 母ノ曰ク「明日汝ハ學校へ行く前に第一番大きな最上の林檎を客家の中から擇り出してそれを汝の「かくし」の中に入れて置きろして今度汝が其の惡き女子と出會ひ若しも汝を罵りかけたらば其林檎をおやり」ト

(第七節) シウリヤ驚テ曰ク「何故母上あれ程度々私を迫害た惡き女子と如何して林檎をやるのが出來ますものか」ト然ルニ其母ソレヲナス所以ノ理由ヲ少ク告ケタレハシウリヤハ始メテ其ノ助言ニ從フヲ決定セリ

(第八節) 翌日シウリヤハ其朋友ト學校ノ途ニ進ムニ際シ再タヒ彼ノ

惡女子ニ會セリ女子ハシウリヤ等ヲ見ルヤ直チニ堅キ雪丸ノ一片
ヲ把リテシウリヤノ顔ニ投ケ付ケ強ク之レヲ害シタリ

(第九節) シウリヤハ不意ヲ打タレテ一時愕然タリシモ其精神恢復ス
ルヤ滿面痛苦ヲ感シナガラ惡女子ノ方ニ進ミ手ヲ延ヘテ大ナル熱
セル林檎ヲ惡女ニ與ヘ謂テ曰ク此ハ汝^{あなた}上^{あが}る美^{うつく}き林檎ガ有^あま^まとト

(第十節) 惡女子奇怪ニ堪ヘス然ルニシウリヤ柔和ナル聲ヲ以テ再ヒ
謂テ曰ク此^{あなた}ノ林檎ヲ汝^{あなた}上^{あが}げませようト女子林檎ヲ取り謂テ曰ク
「私^{わたし}ノ最早^{いちばん}や汝^{あなた}も又^{また}ハ其^{その}ノ小嬢^{こぢやう}も雪丸^{ゆきだま}ハ投^なげるとを致^{いた}さまいト

(第十一節) 是レ巧妙ナル勝利ニアラズヤ彼^{その}ノ惡女子ハ如斯ク徳ヲ以
テ怨ニ報ヒラレタルガ爲メニ充分其惡意ヲ挫折セラル是ハ二重ノ
勝利ナリト謂フ可シ如何トナレハ獨リ其己^{その}レノ怨敵タリシ女子ニ
勝ヲ制シタルノミナラズ尙ホ己^{その}レニ克ツヲ得タレハナリ即チシ

ウリヤハ最初惡女子ヲ罰セントスルノ情紛然トシテ其心ニ在リシ
モ終ニ斯ノ復讐ノ念ヲ轉シテ彼レニ會スルニ及ンテ之レニ贈ルニ
愛ノ賜モノヲ以テシタルハ實ニ其私慾ニ勝ヲ得タリト謂フヘキナ
リ

○第七章 エレン及ヒ其ノカナリヤ鳥ノ事

(第一節) エレン、ロッドマン數多ノカナリヤ鳥ヲ飼ヘリ其鳥善ク馴レタ
ルヲ以テエレンハ籠ノ戸ヲ開キテ其欲スルガ儘ニ室内ヲ飛回ラシ
メタリ

(第二節) 一日エレンノ弟キヤスパー「ブ^ブリキ」ノ小サキ四輪車ヲ遊具店ニ
購ヒ得テ家ニ持テ來レリエレン之レヲ見テ曰ク「オ、私^{わたし}ノ可愛らし
いカナリヤガ其四輪車ヲ室内ニ牽キ回るやうな致^{いた}へ付られぬか知

らぬト

(第三節) キヤスパーノ曰ク「若し汝が彼等よあてはめるやうな馬具を充
分少さくお作りおら彼等が牽きませう」ト

(第四節) 時ニエレン狭キ薔薇色ノ紐ノ一小片ヲ求メ得テ一ノ頸輪ヲ
製シ然ル後一ノ糸管ヲ取り之レヲ數片ニ切斷シテ革紐索網トナシ
裝置全ク成就セルキヤスパー一ノカナリヤ鳥ヲ捕ヘ來レバエレン
ハ之レニ馬具ヲ置キテ之レニ少サキ四輪車ヲ駕セリ

(第五節) 最初ニ鳥ハ飛フコトヲ試ミタルニ四輪車ハ四分ノ二「ポンド」
餘ノ重量ニ過キサリシモ鳥ハ之レヲ重ク覺ヘテ床ヨリ牽キ起ス能
ハス然レモ間モナク躍リ始メテ遂ニ四輪車ヲ牽キ室内ヲ運轉スル
ニ至レリ

(第六節) エレン及ヒキヤスパーハカナリヤ鳥ノ小サキ四輪車ヲ牽キ歩
ルヲ見テ大ニ喜ベリ然ルニ其餘ノカナリヤ鳥ハ室内ヲ飛ヒ回リ

テ椅子ノ上ニ止マリ甚々恐怖シテ見ヘタリ

(第七節) 兩人ハ暫時慰ミタル後エレンハ其鳥ヲ放チ遣リタルハ鳥ハ
飛テ籠中ニ入レリ如斯シテ速カニ多クノ鳥ヲ教ヘテエレンハ其欲
ズル時ニ彼ニ小キ四輪車ヲ牽キ回ラシメタリ

(第八節) 我ハ今キヤロリント名ツケラレタル小女ニ就テ一話ヲ語ルヘ
シキヤロリンハ美麗ナル小サキカナリヤ鳥ヲ飼ヒ此鳥朝ヨリ夜ニ至
ルマテ歌ヘリ

(第九節) 其鳥ハ羽色黄金ノ如ク頭黒ク美麗ナル動物ナリキヤロリン
ハ常ニ木實糟滓ヲ與ヘ又時トシテ少許ノ砂糖ヲ與フルヲアリ其他
毎日清澄ナル水ヲ飲料トシテ與ヘタリ

(第十節) 然ルニ一日鳥ハ痛ク鬱シテ見エタリシガ翌朝キヤロリン水ヲ
與ヘントシテ來レルキ鳥ハ已ニ死シテ其籠底ニ墜チ居タリ

(第十一節) キヤロリンハ其鳥ヲ失ヘルヲ悲シテ啼キ出シ久シク哭シテ止マサリキ其母之レヲ慰メント欲シ往テ前者ヨリモ奇麗ニシテ且ツ活潑ニ歌ヘル他ノカナリヤ鳥ヲ買ヒ來リテ籠中ニ入レ置ケリ

(第十二節) 然ルニキヤロリンハ此ノ新シキ鳥ヲ見ルヤ前ニ倍シテ啼キ出セリ其母之レヲ怪シミ謂テ曰ク「私ノ愛嬢よ何故汝ハ何時までも悲んで居るぞへ泣たどて死んだ鳥を生き復らせる」とハ出來ぬ此所に汝が前に失たよりも猶奇麗な他の鳥があるよ」ト

(第十三節) 然ルニキヤロリンノ曰ク「ア母上よ私の彼の怜れむべき死んだ鳥よ爲そへき程の親切を盡さず且つ盡すべきとを悉く盡しませあんだ」ト

(第十四節) 母ノ曰ク「可愛いキヤロリンよ汝ハ始終其鳥の爲めに常々氣を付けて居たのに」ト

(第十五節) 小女答テ曰ク「否母上よ始終でハありませあんだ此鳥が死ぬ直き前よ私が鳥よ與へる爲めよ汝から貰つた砂糖の片塊を將て來て與へるに自ら喰べてしまいました」ト小女ハ悲シキ心ヲ以テ斯言ヲ語レリ

(第十六節) 又手小女キヤロリンハ其怜レムベキ鳥ヲ惡シク遇シタリシヲ思ヒ出タシテスラ尙ホ之レヲ悲歎スルトセハ兩親ニ親切ヲ盡サ、ル惡童等ハ若シ其兩親ヲ失ヒタル後之レヲ思ヒ出セハ其心ノ憂苦ハ果シテ如何アラン乎

○第八章 火中ノ想像

(第一節) ヴィライス氏其兒童ノ食堂ニ群集シ來ルヲ見テ謂テ曰ク「諸子説話ヲ是非トモ聞カント欲セハ談シ聞カセシ故ニ吾カ云フヲ聞カレヨ諸子皆ナ靜坐シ吾カ説終ルマデハ一語ヲモ話ス勿レ今吾レ

將ニ語ソトス

(第二節) 「クリストマス」ノ時兒女アレノ氏ノ家ニ集リ與ニ遊戯セリ時ニ雪地上ヲ掩ヒ朔風楡樹ヲ打テ響ケリ

(第三節) 兒女ハ其思想ニ在ル悉クノ遊戯ヲ盡シテ後之レニ倦ンデ火ノ邊ニ圓坐シ林檎ヲ食シ或ハ菓菓ヲ裂キテ之レヲ食ヘリ

(第四節) 兒女各其食事ヲ終リテ其殻ヲ爐灰ノ中ニ投ス一小童アリ謂テ曰ク見ヨ此殻能ク火ヲジテ綠色ニ燃ヘシム加之火中ニ小童女ノ相遊戯スルカ如キ物ヲ見ルト

(第五節) 一人ノ曰ク我レ其中ニ一ノ船艦ヲ見ルヲ得タリ其船體帆檣及ヒ帆ヲ具シテ今將ニ洪濤ノ上ニ浮ハントスルモノ、如シ我レ未ダ曾テ船ノ之ヨリ勝レタルヲ見ズ必ズ正ニ諸君モ之レヲ見ルヘキナリ其部分ハ舳ニシテ他ノ一端ハ艦ナリ請フ一見セヨト

(第六節) 是ニ於テ皆其船ヲ發見センコトヲ勤メタリト雖モ一人ノ能ク之レヲ見得ルモノナシ又一人謂テ曰ク我レ船ヲ見ル能ハスト雖モ善ク一ノ駱駝ヲ見ル恰モ眞物ノ如シ

(第七節) 其首長クシテ其背ニ二個ノ尙癭アリ恰カモ其主人アラブ人及ヒ物品ヲ載セテ沙漠ヲ進行セルカ如シ實ニ最上ノ駱駝ナリ

(第八節) 其ノ駱駝ハ如何ニ最上ナルモソレヲ語ル人ノ外ハ之レヲ見ルモノアラス各童勤メタリト雖モ遂ニ徒勞ニ屬セリ

(第九節) アメリアナル小女アリ終ニ謂テ曰ク我レ駱駝ヲ見ル能ハスト雖モ牧者ノ其周圍ニ羊群ヲ率ユルヲ見得タリ牧者ハ手ニ鞭ヲ持テ羊群ノ或ハ立チ或ハ伏スルアリ又子羊ヲ處々ニ認ム嗚呼何ソ美麗ナルヤ

(第十節) 其他ノ諸童ハ再タヒ其眼ヲ豁開シ身ヲ火ノ方ニ屈シ其羊群

ヲ見ントスルモ遂ニ能ハス

(第十一節) 終ニ二嬢アリ其頭髮光潔ニシテ其顔色柔順美麗ナリサキ
ニアメリアガ呼テ牧者トナシタルモノヲ指テ寧ロ天使ノ如ク見ユ
ト云ヘリ

(第十二節) 此嬢天使ノ羽翼及ヒ其手ニ琴ノ如キモノヲ持テルヲ發見
シテ曰ク諸君赫々タル金光天使ノ頭邊ヲ圍ムヲ見ルベシト此レ亦
タ如何ニ明白ナルモ其嬢自身ノ外ハ眼ニ之レヲ見得ルモノナシ
(第十三節) 各自火中ニ見タル異物ヲ互ニ顯サント試ミタルトキ適マ
アレ^ン氏ハ童女等ノ愉快ニ且ツ樂シクアルヤヲ見ント欲シテ其室
ニ入り來レリ

(第十四節) アレ^ン氏ハ其頬ハ赤ク其歩ハ固シト雖^ヒ而モ其頭髮ハ年
齡ノ爲メニ白雪ヲ戴ケリ而シテ氏ハ久シク有用ナル世事ヲ取リ其

間ニ修メ得タル智育ハ實ニ尠少ナラス

(第十五節) 氏カ室ニ入り來ルヤ喜ハシキ兒女ノ群ハ各其火中ニ見タ
ルモノ否寧ロ之レヲ見タルカ如ク想像シタリキ事物ヲ舉テ氏ニ語
ラント欲シ各皆ナ同キ物ヲ見ル能ハサリシ所以ヲ氏ニ質問セリ

(第十六節) アレ^ン氏ハ唯々トシテ童女輩ノ了解スルニ苦ミタリキ所
以ノ説明ヲ試ミタリ是ニ於テ氏ハ異色ノ硝子ヲ童女等ノ眼前ニ置
キ其レヲ以テ火ヲ透見セヨト云ヘリ一人叫ンテ曰ク火は吾が上著
の如く青しト又一人ノ曰ク青しと云ふや怪なり火は草の如く緑な
りト

第十七節 第三者曰ク君何すれど如斯云ふを得るや火は金の如く黄
色なるよ知らすやト第四者曰ク黄色なりや果して然らば甚だ奇な
る黄色なり如何となれば我が硝子を透して見れば火は血の如く赤

し

(第十八節) アレン氏曰ク我が親愛ナル諸子ヨ火色汝等ニ異ナリテ見ユルハ異色ノ硝子ヲ透過シテ見タルカ故ナリ而シテ汝等火中ニ種々ノ異形ヲ認マル所以ハ異ナリタル思想感覺ヲ以テ之レヲ見タルカ故ナリ

(第十九節) 航海ノ事ヲ讀ンテ愉快トスルモノ水夫ノ説ヲ聞テ耳ヲ傾クルモノ洪濤白波ヲ蹴テ航行セシムヲ望ムモノ凡ソ不斷其思想ニ在ルモノヲ火中ニ發見スルハ別ニ怪ムニヒラス

(第二十節) 又沙漠商業及ヒ駱駝ノ説ヲ讀ミ或ハ聞クヲ喜フモノモ亦然リ其心ニ常ニ樂シミトスルノ想像ハ其愉快トスル物ヲ現出スルヲ扶クルモノナリ斯ノ理ニ依テ汝等ハ皆其心中ニ最モ愉快トスル所ノモノニヨリテ感化セラレタルナリ

(第二十一節) 是故ニ吾人ハ善良有用ノ事ヲ以テ樂シトスヘシ果シテ如斯クセバ心ニ愉快ナル思想即チ心裏ノ肖像ヲ啻ニ己レガ認ムルノミナラスシテ又他人ヲシテ己レト同快ヲ覺ユルノ途ヲ知ラシメント欲スルノ念ヲ起スニ至ル可シト

○第九章 破損シタル窓硝子ノ事

(第一節) 數年已前數十人ノ童子校舎ノ前面ニ於テ打球ノ遊戯ヲ催フセリ一童其棒ヲ以テ球ヲ打チシニ誤テ其球ヲ硝子ノ障子ニ投ケ其勢ノ烈シキ遂ニ之レヲ破損セリ

(第二節) 程ナク校鐘ノ響クヲ聞キ各々遊戯ヲ捨テ、勉強ニ從ケリ時ニ先生親切ニ其硝子障子ヲ破損シタルハ何人ナリシヤヲ問フニ一人ノ之レニ對フルモノナカリキ硝子ヲ破損セル童子モ之レヲ白狀セズ其同遊モ亦ク告發ヲナサ、リキ

(第三節) 時ニ校務ニ執掌セル貴女ハ其學生ノ實事ヲ隱蔽セルヲ思ヒ
 ナ心中甚タ憂ヘリ貴女固ヨリ硝子ノ價ヲ惜メルニアラス又損毛ノ
 其身ニ及ハソコヲ恐レタルニモアラス只其學生ヲ愛スルノ厚キ其
 學生ヲシテ衆人ノ信任ヲ受クルニ至ルヘキ舉動ヲナサシメソコヲ
 希望シタレハナリ

(第四節) 貴女ハ其學生ノ後來人ニ尊敬セラレ且ツ幸福ヲラソコヲ企
 圖シテ已マス是レ若シ今ニシテ彼等カ不信實ニ陥リ過失ヲ隱蔽ス
 ルカ如キコアラハ到底其尊敬ト幸福ノ望ム可ラサルヲ知レハナリ
 是ヲ以テ心中甚タ悲メリ蓋シ深ク學生ヲ思フノ心ヨリ斯クハ憂慮
 シタルナリ

(第五節) 翌日先生全校ニ説話セリ然ルニ言破損セル硝子ニ及ハスシ
 テ專ラ遊戯上ノ品行並ニ終始其品行ヲ支配スルニ正直ト親切トノ
 主義ヲ欠ク可ラサルコトヲ説ケリ

(第六節) 貴女ハ生徒等ガ何事ニ於テモ己レノ欲スル所口之レヲ他人
 ニ及ホスノ要用ナルコト及ヒ人ノ見ソコヲ恐レテ正道ヲ取ルニ非ス
 シテ自己ノ主義トシテ正直ヲ行フコトハ其ノ至當ノ義務タルコトヲ説
 示シ且ツ曰ク衆人多クノ惡事ヲナシテ其師親朋友ノ決シテ之レヲ
 發見シ能ハサルモ尙ホ吾人ノ思想或ハ行狀ヲ洩サス見知スル者ノ
 在ルアリト

(第七節) 貴女又語ヲ續テ刑罰ハ必定罪ニ伴フコト及ヒ小過ハ漸次ニ大
 罪ニ導クモノナルコトヲ語リテ後數年已前ニアリシ事實ニ就テ親シ
 ク語リテ曰ク童^{わらわ}ありて其母の教訓^{おしな}鳥の巢^{わらわ}と奪^{わらわ}ひ取る事ハ惡しき
 となればなほ可^{わらわ}らそと云^{わらわ}はれたれども童^{わらわ}ハ其母の命令を奉せざり
 き

(第八節) 或る日童わらわ己れの達し得ざる高さ枝又鳥の巢のあると見付
け長き梯子はしこを取りて大きな枝又掛け上りて其手を伸べ恰も之れ
を取らんとするるとき誤て其足滑り大地又墜ちて其腕を折りぬ」ト

(第九節) 先生ノ其説ヲ終ルヤ否ヤヨヨハ其席ヲ起テ曰ク「私が球
を硝子又打ちました私と甘んトて其價を償ひませ」ト

(第十節) 時ニウイリヤム起テ曰ク「シヨシハ其全額を償ふとの正當
でありませぬ我々も一緒お遊んで居りましたれを私の其割前わりまえ丈け
を償ふて宜ふ御座りませ」ト

(第十一節) 而シテ「私も」私も「私も」ト一時ニ叫ヒ出セリ如斯ク正シキ思
想ヲ顯ハセシガ爲メニ滿場ノ者皆心身ニ徹シテ愉快ヲ感セリ

(第十二節) 然ルニ先生ハ再ヒ語テ曰ク「私ハシヨシが其實を白狀そ
る勇氣を振たと並お他のもれもシヨシと與お失費の割前を拂ふ

ことを喜んで見えるを満足する併し此こゝ汝等なお要求せぬ今の通とおし
眞實の顯あらわれたると及ひ汝等か皆喜んで正しきことを爲その念を證
明したるが我身又取て充分である他は望む所がな」ト

○第十章 「爲サ、ルヲ得ス」ト云ヘル言ことばヲ好マサリシ子供ノ事

(ユウジイン) 私も大人おとなで有たら喜かふお左様さようそれバ自ら主人で居
るかお人ひと又ユウジイン汝おまハ此事をせねばならぬ」ト又ハユウジイ
ン汝おまハ其所ところへ行かねばならぬ杯さかと常つね又云いられるとの有るまい私わたしハ
「せねばならぬ」ト云ふ言ことばを聞くは耐えぬ

(母) 汝おまハ其を堪える様又決心せねばならぬ何故なぜなれば汝おまが大人おとなおな
りても是非とも聞かねばならぬか

(ユウジイン) 何故なぜ母上おつかさん私が大人又あつたとき誰たれが汝おまハせねばあふぬ」
と私わたしよいひ得ると思召おぼしめすか

(母) 汝の父上が今朝働き人よ彼等の枯艸を取入れ稲を蒔らねばおらぬと云て御座たのを聞かなかつたかへ

(ユウシイン) 左様聞ました併し彼等の日雇とりで父上が彼等よは手間賃を拂てお遣りだもの

(母) それなら汝とても手間賃を拂られて居るでないか汝の食物や衣服の代を拂ふの誰人だぞ汝の昨夕汝の伯父さんが来て「子供等の其教育よ費した半分丈けも仕返のしないものだ」と云て嘸て居たのを聞かなかつたか

(ユウシイン) 左様併し中よの子供等が何んな事でもせねばおらぬやふよ思ふて居る人がある様よ見えませ私の人大人よなつたら船夫よなる積りです

(母) 左すれば何でも皆せねばならぬと云ふとで押し切て有るといふことを見るであらふ船長の大騒殿しくつて氷夫の皆な氣丁面よ命令を守らねばおらぬ

(ユウシイン) 縦令それよしたところが早晚働かなくつても生活れる丈けの金満家よ多分おられるであらふ其時こそ誰人が私を使ひ立てるとが出来るものか

(母) 其時よは汝が流行品好きの人よあるであらふと思ふ左それ汝の仕立屋が斯ふいふ風よ上着を製調ねばうつりませぬの帽子屋か「汝の最少と意氣な帽子を御用ひよならねばいけませぬ」と云ふであらふ

(ユウシイン) 拂ふ丈けの金子さえあれば仕立屋か私よ新しい衣服を一襲持たねばおらぬといひ帽子屋が新形の帽子を調へねばおらぬといふても少しも不快でいありませぬ

(母) 左様かゝ併し昨日金満家の人が行き度ないが裁判所へ行かねばならぬと云て居るを聞た

(ユウジイン) 行き度ないよ何故行かねばなまませぬか

(母) 其の人の或る裁判事件も必用な証人であるから裁判所から呼び出しを受け是非證據と云はねばならぬ其れ故貧富とも各自務めねばならぬ義務あることが合點が行たであらふ

(ユウジイン) オ、左様いふ事と前から知て居たならあれ程其言を嫌ひにしなかつたでえよふせねばならぬと云ふ言は爲すへき義務を吾人も示すものたること今篤と合點が行ました

(母) 左様サ語を換て言へば其言の汝の爲す可き義務を指示すもので何事も義務であると知たら喜び勇んで盡さねばならぬ

○第十一章 小事詩

(第一節) 小事小事ナリト雖も實ニ積ンデ一生ヲ成ス一言一見一聲ト雖も能ク平和争鬭ノ孰レヲモ醸スニ至ル

(第二節) 不意輕卒ニ(口外シタル)不親實ナル一言モ能ク心ニ怒ヲ起シテ親友ノ間ヲ裂クニ足ル

(第三節) 一見時トシテ能ク人心ヲ痛メ一聲能ク屢々人ヲ哭カシムルニ至ル

(第四節) 親實ノ一爲和順ノ一言能ク憂悶ニ屈シタル者ヲ慰ムルニ足ル

(第五節) 然レハ則チ吾人ハ宜シク如斯基小事ニ注意シ互ニ相愛シ相敬シ以テ一言一見一聲モ朋友兄弟ノ心ヲ痛ムルナカラノヲ勉ムヘシ

○第十二章 更紗布ノ三角形ノ一片

(第一節) 一貴女アリ予ニ語テ曰ク「私の私の畢生一度の賊と決して忘れるとの出来ませぬ其れの齡七八歳も過たぬ時もありしとでありました」

(第二節) 學校の路次殆んど毎朝ベンチットと云ふ夫人の家も立寄り其小嬢フロラを見舞ふことを常として居りました此小嬢の三歳ばかりもして曾て世も生れたる最も愛すべき小嬢の一人でもありました

(第三節) 一朝ベンチット夫人が最も美麗なる更紗を以てフロラの衣服を製調を見て其更紗の今まで見たことのない美しきものと思ふより今自分が縫て居る上懸の縫ひ合せも加へん爲め頻りも其一片が欲くなりました併し少し下されと云て乞ふとの好ませなんだ

(第四節) 其内もベンチット夫人が室を出ましたら私の牀の上も落ちて有た一つの三角の小片を摘擧げ懐の中も隠して其家を出て途次

彼の奇麗なる更紗を或の眺め或の隠し如何も首尾能く其れを手に入れたと心も誇りながら學校の途も進みました

(第五節) 然るも風と其れの盗んだのであると云ふ思想が心の中も起りて大騒心苦しくなりそれが爲め學校も在ても自分の學課を修めるとがなりませず何より私の咽の中も大きな塊りが有やうも覺え其上も懐中も在る三角の更紗が其の三つの尖りで私を刺して有るやうも感しました

(第六節) (顔色の如何も變じて有りしと見え學校の先生が病氣であるかと私に尋ねられました時に私の左様と答へかけましたがいやく盗みをした上も又虚言を言ふの罪を重ねていならぬと幸に思ひ附きました故心地が悪ひと答へました

(第七節) スルト先生「それなら少しの間遊歩場も出でよ左それバ直

又快よくなるであらうと親切又云ふて下さりました其時私の先生が左様親切にして下さらねばいゝ私の悪事を御存じであれは左様又親切に云て下さるまいと思ひました

(第八節) 私の外へ出て更紗の片を隠す所を見出さふと思ひましたが何處よそれを隠していゝやら少しも分らず必ず誰かそれを見附て私が其れを盗んだとを知るだらうと心配すること一方あらず幸ひ杭よ小さき穴あるを見附け是れぞ究竟の隠し場であると考へました

(第九節) 彼の穴の中よそれを押込んで少しの心安うらうと思ひの外彼の純た綺麗な色が依然として私を煩ひし子供等が急度其れを見出そであらうから最少と慥なる場所を尋ねゝばならぬと思ひ再度ろれを取り出し口よ入れて吞込んど試みたれども逆も出来ず心

倍す動搖して前よ倍して悪しき心地が仕てまいりました

(第十節) 學校から住家へ販る道よ橋が有ましたが是れが更紗を捨るよの究竟であると思ひ其れを水上よ抛げて其の徐かよ流れ下るを見て居りました

(第十一節) 彼の更紗の忽ちよして小き渦流の中よ掛りて流れもやらずして只廻々ト洄漩して居りましたときよ心よ思ふやう最早流れて行かぬかヨシ流れて行くよせよ何處へ往くで好らうか若しやべンチット夫人の更紗でありて私がそれを盗だど知て居る人の眼よ認りいせぬかと頻りよ氣を揉んで居ました

(第十二節) 子供心よ深く悔ひて頻りよ心を痛めながら橋よ倚りかゝりて見て居る間よ土手よ生えて居た樹の根よ流れ着き誰よも目よ附く處よ止まりて仕舞ましたから(爰よ此儘捨置け)往き來の人の

之を見ずまい居られを又居もしまいと思ひました

(第十三節) 忽ち馬車が橋の方へ向て馳せ来る音を聞き正しくベンチット夫人が其馬車の内へ在りて彼が更紗を見附け私の伯父伯母朋友其他の知己も私が盗賊をゐしたとを語るであらうと思ひました

(第十四節) (ソコエ)橋の欄干を乗り越へ川の土手へ這ひ下りて馬車が通り過ぎる迄隠れて居りました稍物静まかりて後隠れ場から出て來りて彼の更紗の在る處へ手を延べて見ましたが腕が短かくて達かずそれ故靴を脱ぎ靴下を捨て、水中へ入り長さ竿を以て彼の布を取り得ました併し其の片々如何していか更に分りませなんだ

(第十五節) 靴を穿て居る間も其ベンチット夫人の家へ持ち還り竊とそれを牀の上に置いて家路へ走らんと決心し直ち其家へ至ればベンチット夫人は窓の側へ坐して居ました戸を開ひて更紗の片々廊下

へ抛て走り去らんとする時後ろより呼び回して「我が愛嬢サラーヨ汝の何を苦よして斯くのぞ」と云ひれました

(第十六節) 私いふりかへり得ませなんだが再度呼び回されて徐々歸りましたスルト夫人の「オヤサラー汝の如何したか大騒青ざめて見えるヨ何故彼の更紗の片々廊下へ抛げたか」と云ひれました

(第十七節) 私が今朝汝の家へ居たときそれを偷みましたと云ひました故に定めて「モウ再度家へ來るといならぬ大切な嬢フロラを汝の様な悪しき娘と與ふ遊いせられぬ」と云ひれるであらうと思ひの外夫人の私を抱擁して唯可愛ッウよとのみ云ひれました

(第十八節) 此日ハ朝から咽の痛と頭の裂れるが如くなりしも未だ涙を流したといありませんんだが此一語が私の腸へ浸り渡りて堪まらずワット啼き出しました其時夫人の自身の方へ私を引き寄せ親

しきサラーヨ其始末を話して聞かせナト云ひれました

(第十九節) 其始末を語りしと段々心が軽くなり話し終たとき夫人の「私に此上汝の悲しみを増すやうな言を云ふより及ばぬと信する汝の今日充分苦しき思ひをしたからモウ再度不正直な誘われるやうなことはないと思ふ」ト云ひれました

(第二十節) 夫れから彼の夫人の其奇麗な更紗の片を四つ五つ呉れて「汝の縫ひ合せの中へ之れを入れてるれを見る毎どお何時でも今日の事とオ忘れてないヨ」と申されました私の子供等が今其上懸を着て寝て居りませが私の其を見るごとよ彼の奇麗な三角の布で苦んごとを思ひ出さぬとの一度も有ませぬ」ト

○第十三章 農夫及ヒ其鸚鵡鳥ノ事

(第一節) 一農夫數週間勞働シテ一大島地ニ玉蜀黍ヲ植附ケルヲ終

ヘタリ然ルニ萌芽地上ニ現ハル、ヤ忽チ群鴉畠中ニ來テ其萌葉ヲ摘取スルヲ始メタリ (註アメリカ人ハ玉蜀黍ヲ單ニCornト云フ)

(第二節) 農夫ハ將來ノ収穫ノ如斯ク損害セラル、チ惡ミ之レヲ追逐セシメテ決セリ是ニ於テ其儘カナル銃ニ丸ヲ填メ再タヒ來ラハ之レヲ撃チ拂ハント其心ニ謀リタリ

(第三節) 農夫ハ多言ニシテ且ツ有害ナル鸚鵡ヲ飼ヒ之レニ自由ヲ與ヘテ其欲スル所ニ往クヲ得セシメリ其名ヲ「フレッチーボール」ト云ヒ善惡ヲ擇ハズ友ト交ルヲ好メリ故ニ群鴉畠中ニ在ルヲ見ルヤ總テノ障害物ヲ躍リ越ヘテ忽チ夫ノ玉蜀黍ノ芽ヲ引拔ケル黒賊(鳥)ヲ云フ)ノ中ニ來レリ

(第四節) 農夫ハ群鴉ノ作物ヲ荒ラセルヲ認テ其銃ヲ執リ銃カニ生垣ニ沿フテ匍匐シ大膽ナル賊ヲ去ルコト數歩ノ所ニ來リ其銃ノ狙ヲ

定メテ賊中ニ發砲セリ其發聲ト與ニ群鴉ノ叫ト「プーアボール」ノ呻聲ヲ聞ケリ(註鴉ノ本稱ハ「ボール」ナリト雖モ其場合ニヨリテ「アレ」チ「美」又ハ「プーア」(愍然等ノ適當ノ形容詞ヲ附シテ共ニ名稱トス)

(第五節) 農夫ハ狙撃ノ結果如何ヲ點檢セントシ行テ死セル群鴉ノ中ヲ一見シテ夫ノ有害ナル鴉ノ地上ニ翼ヲ伸ヘ痛ク其羽毛ヲ害ハレ且ツ其一脛ヲ傷ツケテ仆レタルヲ認メ大ニ驚愕セリ

(第六節) 農夫叫ンテ曰ク「汝ハ愚なる鳥であるヨ是れ惡友又交はるの結果である」ト鴉答ヘス恐クハ其ノ何ト云フヘキ乎ヲ確カニ知ラザリシ故ナルベシ農夫ハ「プーアボール」ヲ携テ家ニ來リシキ兒童等其傷キタル脛ヲ見テ喚ンテ曰ク「父上おとうさん」レハ何如どうしたのでとカ何なにが吾等の奇麗な鴉と害しましたか」ト

(第七節) 「プーアボール」ハ殊勝ヲシキ聲ヲ以テ「惡友なり惡友なり」ト答ヘリ農夫曰ク「然もちろんであるそれが原因であるボールハ私が發砲したとき又惡しき竊盜を群鴉と仲間となりて在りし故又群鴉を撃たんとしたる彈丸の中たのである」ト

(第八節) 兒童等ハ時ニ縛帶ヲ以テ其傷キタル脛ヲ卷キ二三週間ヲ經テ鴉ハ已前ノ如ク活潑ナルヲ得タリ然ルニ玉蜀黍圃ニ行キ群鴉ト交ハリ(身ニ害ヲ受ケテ)大ニ悟ル所アリシヲ其後決シテ忘却セサリキ

(第九節) 此後若シモ夫ノ農夫ノ兒童等ガ相互ノ間ニ爭論ヲ起シ又ハ意地惡シキ友ト與ニ遊戲ヲ營ムフアレハ鴉ハ「惡友ヨ惡友ヨ」ト叫喚セリト云ヘリ我カ少壯ナル朋友ヨ鴉ノ言ヲ記憶シテ常ニ惡友ヲ避ケヨ

○第十四章 小サキピートー及ヒ偉人ノ事

(第一節) ビートーハ愛スベキ者ニシテ又活潑壯快ナリ殆ント終日放歌シテ日ヲ送り其心常ニ樂シク何事ノ生シ來ルモ其快ヲ損スル能ハサルモノ、如シ

(第二節) 一日逍遙セントシテ其里ヨリ少シク距リタル大ナル森ニ行ケリ曾テ此邊ニ來リシコアルモ其ノ暗黒ナルニ恐レテ中ニ入ラザリキ

(第三節) 此日ヤ太陽ハ赫々トシテ其光ヲ放チ地ニ咲ク花ハ美々トシテ實ニ愛スヘシ爲メニビートーハ其心常ニ倍シテ樂シク森中ニ入リテ或ハ唱歌シ或ハ口笛シ全森其音ヲ以テ響キ渡レリ暫ク花ト木トヲ以テ其心ヲ慰サメ斯ク愉快ノ富ヲ得テ終ニ充分ノ歡ヲ得タルカ如クナリキ

(第四節) 此森中ニ清鮮ナル小流アリ其水如何ニモ清淨ナレバビート

トハ其渴シタルヲ以テ身ヲ屈シテ之レヲ飲マントセリ然ルニ同時ニ背後ヨリ不意ニビートーヲ捕収スルモノアリテ身ハ已ニ醜キ猛惡ナル偉人ノ手中ニ在リ

(第五節) 偉人ハ凄^スキ顔ニ笑ヲ含ミテビートーヲ熟視シ其口ヲ開キテ聲ヲ發シビートーヲシテ大ニ戰慄セシメタリビートー以爲テク偉人直チニ我レヲ喰フヘシト然ルニ偉人之レヲ爲サスシテ却テビートーヲ大ナル袋中ニ入レテ運ヒ去レリ

(第六節) ビートーハ頻リニ袋ヲ脱セノコトヲ試ミタレモ終ニ得ス偉人ビートーヲ提ケテ終ニ其家ニ來レリ此所ハ四面圍ムニ壁ヲ以テシ且ツ鬱然タル場所ニシテ一ノ艸花ヲ見ス偉人内ニ入り戸ヲ鎖シテビートーヲ袋中ヨリ出セリ

(第七節) 是ニ於テビートーハ偉人將ニ我レヲ殺サントスト思ヘリ蓋

シ四方ヲ伺フニ大ナル火鉢アリテ其前面ニピートト同類ノ炙ラ
レテ偉人ノ晚餐ニ供セラレントスルモノ四アルヲ見タレハナリ然
ルニ偉人ハピートトヲ殺サズシテ強ク其体ヲ握リ大ニ痛苦ヲ覺ヘ
シメ終ニ兼テ備ヘタル牢獄ノ内ニ押シ込メリ

(第八節) 牢獄ハ暗黒憂鬱ナル室ニシテ鐵柵ヲ前後左右ニ築キ其脱出
ヲ豫防セリピートト鐵柵ニ抗シテ其頭ヲ打テ付ケ逃亡ヲ試ミント
シテ其牢中ノ前面ニ衝突シ又背後ニ掀倒ス彼ノ偉人ピートトニ一
片ノ麵包ト一椀ノ清水トヲ與ヘテ去レリ

(第九節) 翌日偉人來リテピートトノ麵麥ヲ食スルコトナキヲ見ルヤ其
頭ヲ捕ヘ少許ノ麵麥ヲ其咽ニ押シ込ミ其食ハサルヲ見テ不快ノ色
ヲナセリ怜レム可シピートトハ飲食ニ堪ニザル迄ニ恐懼シタルナ
リ

(第十節) 其翌日ピートト獨リ幽暗ノ中ニ在リテ無聊ニ堪ヘス是ニ於
テヤ此ノ怜レムベキモノハ其故郷ヲ戀ヒ其同友ヲ思ヒ赫々タル日
光鬱鬱タル樹林其他平常飲食シタル甘味ヲ思ヒ出シ叫喚シテ鐵柵
ノ間隙ヨリ去ラントヲ試ミタメニ其頭部肢節ヲ打テ之レヲ傷タ
タリ

(第十一節) 偉人再タヒ來リピートトノ曾テ愉快ナリシキノ如キ唱歌
ヲ聽カンコトヲ請ヒ歌ヘ歌ヘ歌ヘト云ヘドモピートトハ牢中唱歌
ニ堪ヘスシテ悲シメリ

(第十二節) 偉人時ニ赫トシテ爰ニ怒リピートトヲシテ歌ハシメント
欲シテ牢獄ヨリ牽キ出ダセリピートト大ニ叫ビ煩亂悶爭シテ終ニ
偉人ノ手中ニ死セリ嗚呼我カ少壯ナル讀者ヨ怜レムヘキピートト
トハ即チ小鳥ニシテ偉人ハ猛惡ナル童子ナリキ

○第十五章 輕少ナル親切詩

(第一節) 彼ノ輕微ナルサクラサウ蓮馨花若シ其ノ黄金色ノ英ヲ垂レ我ハ如斯キ

小花タリ寧カサスリツ口生セサルニ如カスト云ヒ(地ニ現セザレハ)疲レタル旅

客ニシテ其聲カサスリツ音ナキヲ嘆キ兒童ニシテ窄谷ニ之ヲ見サルヲ愛フル

者果シテ幾干ツヤ

(第二節) 若シ彼ノ草葉ニ懸ル閃々タル露滴ニシテ我ハ一小露滴ニ過

キス寧カサスリツ口地ニ墜ツル善カヲント云ハ、之レヲ戴キタル草葉ハ一滴

ノ之レヲ潤ス者ナキヲ以テ日ノ未タ終ラザルニ太陽ノ熱ニ罹リテ

終ニ凋ムニ至ラン

(第三節) 夏ノ日若シ彼ノ輕風旅客ヲ爽涼ニスルニ足ラズト思ヒ(吹カ

ザルニ至ラハ)誰カ微風ト雖モ其吹カサルヲ愛ヒ彼ノ風ニシテ此言

ヲナスハ大ニ誤マレリトセザルモノアランヤ

(第四節) 一小兒童ハ蓋シ力微ニ智欠クト雖モ其眞實ヲ竭シ得ル所極

メテ夥シ兒童ノ其愛ヲ以テ人ニ盡ス所多キヲ證センニハ力ヲ要ス

ルヨリ遙カニ愛心ヲ要スルナリ

○第十六章 誕生日ノ訪問

(第一節) オリヅマンソン或ル寄宿學校ニ入りテ三ヶ月間其家ニ在ラ

ズ七月七日ハ正ニ十三歳ニシテ其誕生日ハ適マ休暇中ニ來レリ此

間其家ニ販リ且ツ其朋友ヲ訪問セント欲シテ心中怡々トシテ喜ヘ

リ

(第二節) オリヅハ其人ト爲リ親厚ニシテ其友トスルモノ及ヒ彼レチ

知ルモノ、眞ニ愛スルトコロタリキオリヅ其家ニ來リ居ルコト數

日母之レニ告テ曰ク汝誕生日ノ祝宴ニ二三ノ同友ヲ招クヲ得ヘシ

ト

(第三節) 其母美ナル陶器ノ一組ト小サキ食机及ヒ什具ヲ購ヒ得テ誕生日ノ祝品トシテ之レヲオリヅニ與フオリヅ之レヲ整列シ其ノ友來ルニ及ンテ其美麗ナル祝品ヲ示セリ小女等ハ之レヲ見テ其美麗ヲ稱シ且ツオリヅガ永久ニ幸福ヲ享受セノヲ祝セリ

(第四節) 此日ヤ天氣甚々朗テカナリケレハ小女等ハ前面ナル林ノ中ニ逍遙シテ多クノ野花ヲ摘ミ取り之レヲ美麗ナル花飾ニ編ミテオリヅニ贈レリオリヅノ兄弟ハ一ノ鞦韆ヲ其林ノ一隅ナル涼シ蔭リタル所ニ設ケタリ小女等ハ交ルノ之レニ鞦韆シテ茶鐘ノ鳴ル時マテ愉快ヲ取レリ

(第五節) オリヅノ家ニ近ク高岩アリテ之レヲ老禿頭ノ岩ト名ツク此岩午後ニ及ヘハ家ニ近キ柔頓鮮綠ナル草圃ノ上ニ其涼蔭ヲ成セリ小女等ガ遊戲ニ奔走セル間オリヅノ母ハ其奴婢ニ命シテ食机ヲ此

大岩ノ涼蔭中ニ備ヘシメタリ

(第六節) 小女等ハ家ニ來リ其室ニ入リシニ小卓及ヒ茶器ヲ見ス其如何ヲ怪シミオリヅ庖厨ニ行テ求ムルニ之レヲ見ス會マ奴婢ノ一人微笑セルヲ見テ心竊ニ以爲テク彼等我ニ一驚ヲ喫セシメントシテ事ヲ謀レリト

(第七節) オリヅ走リテ二階ニ上リ各室ヲ巡視スレモ更ニ茶榻ヲ認ムル能ハス心中益々疑ヒ試ニ眼ヲ窓外ニ注クニ及ンテ岩下ノ涼蔭ニ其美シク陳列セルヲ見階ヲ下リ其友ヲ誘ヒ往テ老禿頭ノ岩邊ニ至レリ

(第八節) 處女等ハ爰ニ菓子乾酪及ヒオランダイチヂョ罌荷ストローベリーヲ置キタル茶榻ヲ認メ得テ愉快ナル饗應ヲ得共ニ謂テ曰ク凡ソ罌荷ノ祝宴ニハ未曾有ノ好位置ナリト而シテナリヅガ(其茶具ヲ移シテ)弄ハレタルヲ語り出テ絶

倒シテ笑ヒ且ツ曰クオリヅノ喫驚ハ永ク其誕生日ヲ記憶セシムルニ足ルヘシト

(第九節) 各自岩ノ涼蔭ニ在テ暫時喜樂シタル後共ニ家ニ入リオリヅガ彈セル洋琴ノ調子ニ和シテ歌テ曰ク「何日か再々與ニ相逢ふ時や來む」ト斯クテ處女等ハオリヅノ誕生祝宴ニ列ナリ充分ノ歡ヲ盡シテ各其家ニ歸レリ

○第十七章 バアサノ美麗ナル贈物

(母) 爰今私が貰つた包みものが有るが中よ何があるか知らぬマア開けて見やうオー是れは奇麗な筐だ而して其れよ赤きチャリ毛を持つ善き小女よ贈ルト云ふ添札がある誰れが貰ふであらうか
(バアサ) 母上私が赤ひチャリ毛の持て居りませしが私が善と云へる權理があるや否や其判断は朋友よ任せねばなませぬ

(母) 此れを贈た朋友は親切よ其等の事を判断せられた汝でなければ誰れも此贈りものを貰ふものがない汝誰れがそれを贈たか察するよとが出来るかエ

(バアサ) へー私は此手跡を知て居ります一寸開けて見ませうオト好薰だ茲お小さな薔薇油の瓶があります聖書で讀んぶ薔薇油とても之きよ勝れた香であるまい

(母) バアサヨ汝の左様を親切を朋友を持たの幸福ぶヨ彼女ハ頻りよ汝の事を思て居るヨ

(バアサ) 左様でよ母上私の彼汝の思を深く心よ銘て居りませ何なりとして其親切よ報ひ度思ひませ

(母) 左様サ是から先き出来る事があらふ若し其時機が有たら忘れませ左様するよとを望む思を知らぬ人の可愛らしくもなく又仕合の

善いものでない

(バアサ) オー母上汝の私が此親切な貴女を大切にすることを忘れたり又其仁恵の思を忘れやうと思召すか

(母) 情願汝の左様さいやうにしたいのぞ若し汝が左様な者なれば悲しひとだ併し汝の驚くでゆらふが世間より受けた恩を忘れよがる者が澤山ある誰か左様いふものを汝の知て居かエ

(バアサ) 左様母上私の知て居ると思ひます己れが不幸の時よ扶けて呉れた朋友を扶けぬ人を知て居ますが其人の恩知らずでいありませぬカ

(母) 左様ともうして其人の恩義を忘るれい又それ丈己れが不幸である

(バアサ) 私の其兩親も随はなんぐり又の兩親を幸福なことを勤めあ

い小女や童子を知て居りませ其人等の恩を知らぬものぞと思ひます又兩親の貧窮して居るに自分等の平氣で樂み暮して居る男女を知て居ります此等の恩知らずの中でも殊に甚しき者だと思ひます(母) 左様だヨ汝の言ふ通りそれだから子供の愛の無ひのハ蛇の齒より尙鋭いとい善く言たものだ汝の子供が毎日其兩親の庇蔭を蒙るまどの何程だか知ていあらう

(バアサ) 左様母上日々吾等の爲に汝が衣服を調製し修繕し其他百般の事と成して下さるを見る毎に私等の最少と手傳を致したいものだと思ひます而して父上が私等と衣類や食物を與へ書籍を購ひ又學校へ送て下さる爲め毎日忙しくして居らるゝを見ておれ程親切にして下さる兩親の爲め如何な事したら宜からうかと思ひます

(母) バアサヨ左様である汝の行爲を見ると汝が心よ左様念て居ると
 が知れるそれなれをコソ善き小女の名を汝が得るのである而して
 汝の吾々の地球上に在る朋友の外に親を對する愛と勤とを付て鑒
 察する者があるを知て居カエ

(バアサ) 左様母上吾々の天の父が汝の父母を敬へ汝の神汝を賜ひた
 る地よ於て汝の命を長からしめむ爲めなりと仰せられました

(母) 左様併しながら其兩親も順ならせ又ハ自分等ハ親の勞働したる
 庇蔭で富裕な生活ながら衣食も乏しからしめ省定を怠る人々の是
 の天父の命を殆んど思はぬ様である

○老者ノ幸福ナルヲ見ル其愉快果シテ如何ゾヤ而シテ其ヲシテ然ラ
 シムル所以ノ義務ヲ執ル亦何ソ樂シキヤ吾人ヲシテ始終幸慶ナラ
 シムルモノハ愛ナリ然レハ則チ宜ク博ク同胞ヲ親愛ス可シ殊ニ孝

チ親ニ竭スハ必ス之レヲ怠ル可ラス蓋シ父母ハ吾人ヲ親愛シタレ
 ハナリ

而シテ吾人ハ親アルヲ以テ喜樂ヲ得ルキ我ニ此親アリ又友アラシ
 メ加フルニ綠色美麗ノ地ト生命ヲ樂カラシムルノ萬物トチ賦與シ
 且ツ吾人ヲシテ天上ニ在リテ悉ク光ト生ト愛ナラサルナキ榮光ノ
 國ニ至ルヲ得セシムルノ約束ヲ爲シ給ヘル上帝ヲ忘ル可ラス

○第十八章 苛刻猛惡ノ言ヲ慎シム可シ

(第一節) 一日午後マルサ、スペンサー學校ヨリ家ニ來リシキ其母マル
 サノ容貌舉動ニ依テ不愉快ノ事アルヲ察知シ其ノ何ヲリシガヲ語
 ランコヲ請ヘリ

(第二節) マルサノ曰ク「オ、それの別段の事でも有りませぬ私がつら
 ンシス、ニウトンよ氣よ入らぬ事を申しましたのでフランシスの其

心が裂けさうと泣き出しましたとそれ程氣も障たのを見てアンナ事を云いねば宜つたと思ひました。結局何も氣を悪くする程の事でも無いとサモ大事らしく騒ぎ立たので私の腹が立ちます」ト

〔第三節〕「何故のニ私に汝とフランシス、ニウトンとの眞の朋友だと思つて居たヨ私の兩人の友誼を破るやうな事が出来たのが氣の毒でならぬ何んな言を云て氣も障たのかニ」

〔第四節〕「私のフランシスが意地悪な不眞實な嬢だと申しました平生の兎も角も今日をのり左様でありました何故なれをフランシスの他の處女等が爲て呉れと頼んぶとを單一の事サへ爲て遣らす又休課の時間よも吾等と與り遊びませなんだカラ而して幼きアイタバルンスの扶けられなくても出来たよもセヨ其の加算を手傳て御遣と云ても扶けませなんだ」

〔第五節〕「汝がフランシスの事よ就て苦情を云たと今まで一度も無つたがフランシスの不斷親切も能く事を爲て呉れるでないかニ」

〔第六節〕「オー左様ですヨ母上フランシスの學校中の孰の嬢も劣らず快く且つ親切だと思ひの外今日に限りて全く反對でありました」

〔第七節〕「若し果して然らば私の汝が今日午後フランシスよ大騒苛刻な言を爲したと思ふ多分フランシスの今日何か心配するところが有て汝が意地悪ひことと云たの心お愛ひて居たのであらう若し是の鑑定が違はそバ汝がフランシスよ其様な言を云たのを悔ゆる念の起らぬかニ」

〔第八節〕「左様母上これが左様で有たと知たなら私の實に氣の毒と思ひます」

〔第九節〕翌夜マルサ學校ヨリ販ルヤ其母ノ側ニ坐シ前垂テ以テ其面

ヲ掩テ泣キ出セリ

(第十節) 其母ノ曰ク「オヤマルサヨ汝おまへの今如何どうしたカ何故なぜ左様そんなも哭なく
カエト

(第十一節) 「オ母上フランシス、ニウトンの親愛の小弟が死したまゝたフラ
ンシスが昨日アンナも悲しがつたのの其の事情わけでありましたオ
私のフランシスを意地悪だと云て不親切な言を吐たのの誠まことも氣の
毒で申譯が御座りませぬ

(第十二節) フランシスが今日それと就て残らす語りました昨朝フラ
ンシスが學校へ來る丁度前も其母がアノ可愛らしいヘンリーの太
病びょうだと思ひます分れる様などが有りませぬか心配だ」と其父も云ふ
を聞きましたト

(第十三節) 之れを聞てからフランシスの終日遊あそぶとも人と語を交ゆ

るとも出來ぬ程憂へました二三度も其事情を吾等も語らうとしま
したガ胸が一杯で咽へ嗽せきき込んで話せぬ程でしたト

(第十四節) フランシスが日暮も皈宅したとき其親愛なる小弟の病が
大層重くなりて居りまして日没頃なつも終はかに果はかなくなりまして「トフラ
ンシスの如何いかに様なも悲しふ御座りましたらう而そして私がアノ様も不
親切な言を云て其悲愴を増したトハ如何いかにも氣の毒で思ふも耻はし
ふ御座ります如何いかにかして彼の猛惡の言が取り返したい唯ただそれが願
でと

(第十五節) 其母ノ曰ク「其の出來ぬまどである情願こころ此の痛いたき思おもを爲た
ので汝が以來決して人に粗暴不信な言を云はぬやうも爲なさいもの
だ親切なる言や柔和なる言の常も無害むがいで有て其等の言の屢々悲し
む心も親切なる慰めとなる若し汝が昨日フランシスも柔和も話し

たなら今ふなりては何の位悦ばしいでござらう」

(第十六節) 「母上ママ左様で御座りませう私が話した酷き言お付て口お言ひ顯はせぬ程悲しく思ひます此後人お對して常ニ親切お且つ柔和であるやうお致したいもので御座ります」

○第十九章 雪片ノ美妙及ヒ利用

(第一節) 童子コナリダアア其母ニ謂テ曰ク「ア、雲が厚くて鬱陶しいこと雨降りふなりさうダ左様すると終日家宅も止として居チばならぬ」ト

(第二節) ソレ兒童ハ家ノ内ニ止マルチ好マズ多ク戶外ニ遊戯スルチ擇フモノナリ故ニダアア其聲怒氣ヲ含ンテ斯ク云ヒシモ敢テ怪シムニ足ラサルナリ

(第三節) 其母ハ親切柔軟ノ貴女ニシテ其小兒ヲ愛スルコト深シ是ヲ以テ其小兒ヲシテ其心愉快ニ且ツ幸福ヲラシメンガ爲メニ日々有用

ノ智識ヲ薰陶シ或ハ奇談ヲ語ルコトヲ勤メタリ

(第四節) ダアア其言ヲ了ルヤ屋中ニ遊戯セントシテ行テ將サニ其抽斗ヨリ獨樂小球及ヒ綵球等ヲ取り出サントシタル時急ニ大呼シテ曰ク「母上御覽なされ雪が降る雪が降るサー私が新しい毬を以て遊ぶ好時が來ました私の小妹を庭の周りに牽き回てやらう」ト

(第五節) 其母ノ曰ク「ソレハ大層好遊戯だ併し地面が雪で残らず埋まる迄毬を持ちて外へ出ること待たねばならぬヨ」

(第六節) 應へ來て雪片の徐々お落るのを御覽ヨ漸々早く降て來る時お汝ママの雪の話が聞き度ないかエ私の大層面白い話を爲てやらうと思ふが如何だエ」ト

(第七節) ダアア曰ク「左様ですカ情願話して下さい今雪が降て居るカラ嘸そきの面白ふ御座りませう」ト

(第八節) 母ノ曰クソレデハ雪ノ外のものでなく只凍た雨だと云ふことを話しませう上の空氣が充分寒きとき其處に在る雨又ハ霧が地面へ下つて來るに隨て雪も變化するものである何故なれば上方の空氣が時として地面に接したる空氣よりの餘程寒き事が有るカラト

(第九節) ダアキン曰クオト成程私の雪が降り出してから空氣が却て暖に覺えたことが度々ありましたが私の其のやうな時ハ何故雪が降るか其理が少しも解りませぬト

(第十節) 母ノ曰ク私ハ尙不思議なことを雪も就て話して聞せやう霧や雨が凍るときにハ千變万化な最も奇麗なる形を顯はすもので若し汝が顯微鏡で見ると皆な正しく結晶して居る之を澤山ハ試験した人が九十六種の變化の形を書たことがある

(第十一節) 此繪の中ハ汝ハ最も奇妙な且つ奇麗な形を多く見る日外

汝ハ錦眼鏡の中で見られた種々の形も斯様で有たらうト

(第十二節) ダアキンノ曰ク成程眞ハ不思議なもので御座りますマア雪が个様な奇麗な形を持って居るものごとの決して想像ませなんだ斯く奇麗なことを思はずにハ再度雪を觸ますまい斯様奇麗な結晶を踏み碎ふかと思ふて何だか其上を歩行くのも憚ります併し母上雪ハ何の用を爲すもので御座りませカト

(第十三節) 母ノ曰クヨク其れを尋ねた夫れで汝が雪も付て尙は知りたと思ふのが知れる雪ハ實ハ美麗なるのみならず尙又甚だ有用なるものよて雪が山の上ハ澤山降り其れが溶解るとき小川をなして谷の下へ流れる

(第十四節) 雪ハ又夏空氣を涼しくするとよ用を爲す或る國よてハ雪

が夏中高山の頂より残り其上を過ぐる輓風を涼しくし之より平地の炎熱を調和すト

(第十五節) ザン問テ曰ク「農夫が此冬の雪が充分田野に降らなんだカラ來夏の好き収納を得られぬ」と云ふを聞きましたが母上アレハ何云ふ意味でありますかト

(第十六節) 「農夫の冬の中雪が厚く田野を掩へば嚴しき霜の害より穀物の根又の其輓かなる葉を護ると云ふとを知て居るカラ時々収納が冬枯れてあると農夫の云ふのである」

(第十七節) ザンノ曰ク「ソレテ私が過日讀で居た以撒那の五十五章の事を思ひ出しました其ノ言ニ曰ク「雨雪天ヨリ下り復タ再タビ還ラズ善ク地ヲ浸潤シテ草木ヲ萌芽セシメ以テ播ク者ニ種子ヲ與ヘ食フ者ニ麵包ヲ得セシム吾言ノ口ヨリ出ツルモ亦タ然リ言フ苟ク

モ虚飯セズ吾ガ欲スル所ヲ果シテ我レ之レヲ遣ス所ニ繁盛ヲ成ス」ト

(第十八節) 私の此の文を讀みましたとき雪が種實や麵包に如何なる關係あるかを訝りましたが其疑の汝が善く解て下さつたカラモウ雪が有用なることの幾分を了解致しましたト

○第二十章 勉強ト遊戯詩

(第一節) 勉ムベキ時ハ勉メ遊ブベキ時ハ遊ベ蓋シ是レ快樂ノ途ナリ

(第二節) 凡ソ汝ノ爲ス所力ヲ竭シテ之レヲ爲セ事ヲ半途ニ抛ツハ決シテ正シカラス

(第三節) 一度ニ一事ヲ取り善ク之レヲ成セ是レ適當ノ法ナルハ多クノ知ル所ナリ

(第四節) 數多ノ瞬間モ之レヲ徒ニセハ無用ニ屬ス故ニ宜シク勉ムベ

キ時ハ勉メ遊フヘキ時ハ遊フヘキナリ

「サ
ス」氏「ユニオン」第三讀本意譯卷之上終

明治十八年四月二十一日版權免許
同年七月十五日出版

定價二五錢

口譯兼出版人

東京府士族

佐藤重道

東京麻布區永坂町拾七番地

筆記兼出版人

京都府士族

外山義文

東京麻布區永坂町拾七番地
佐藤重道方

發兌兼出版人

東京府平民

松井忠兵衛

東京芝區柴井町拾六番地

大賣捌書肆

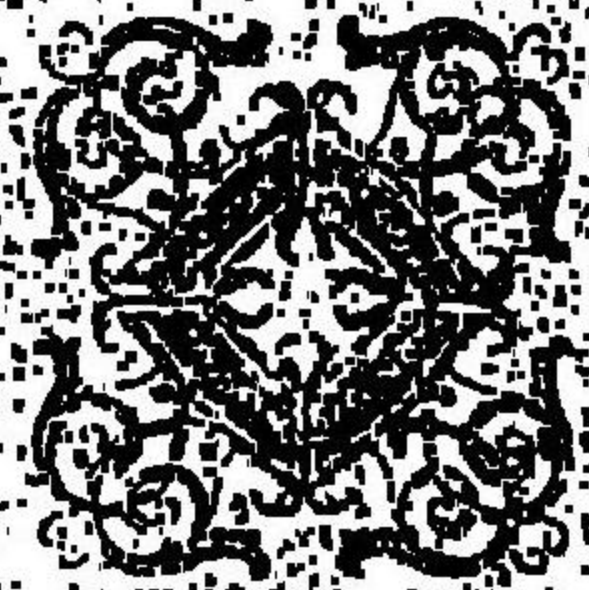
東京日本橋區通壹丁目
同 芝區三島町
同 日本橋區通三丁目
同 日本橋區通二丁目

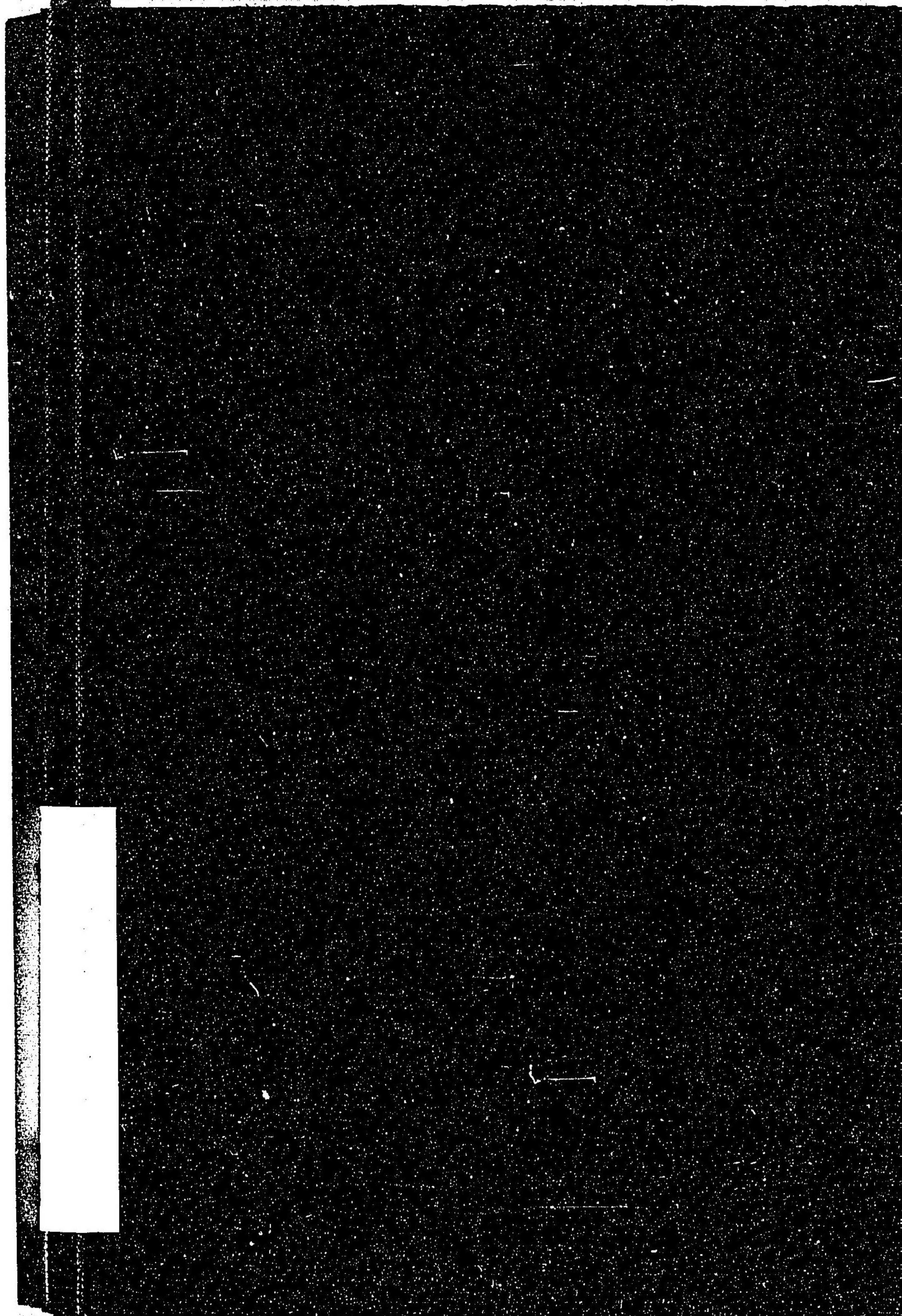
須原屋 茂兵衛
和泉屋 市兵衛
丸屋 善七
山城屋 佐兵衛

東京日本橋區通三丁目
同 日本橋區本町三丁目
同 同
同 日本橋區兩國吉川町

小林 新兵衛
瑞穂屋 卯三郎
金港堂 亮三郎
島屋 一介

東 京 圖 書 館
和 書 門
類 函 架 一 二
冊 號





特27

472

サンダース氏ユニオン
第三読本意訳

国立国会図書館

083646-000-6

特27-472

サンダース氏ユニオン第三読本意訳 卷之上

サンダースノ著

M18

DAH-1205

